三月十日大空襲の前後

金田君子
新井四丁目

私は当時、本所柳原町に住んでいました。家の向かい側にお風呂屋さんがあり、五、六軒先の川添いには材木屋さんの倉庫が並んでいて、どちらも子供達の格好の遊び場所になっていました。南辻橋を渡った所に菊川国民学校がありました。私は五女で、三年生でした。

家の土間には防空壕が堀ってあって、「空襲警報発令！」とメガホンで触れが回ると、夜間なら、電燈の笠に黒い布をかけて外に明りが洩れないように「燈火管制」をしました。

学校では一日一回避難訓練がありました。廊下に整列し、先生の「前へならえ」の号令で両腕を肩の高さまで上げ、上げたままの右腕の肱に左手を添えて、体の幅以上に広がらないように、並んだまま、階段を駆け下りて校庭に出る訓練でした。防空頭巾は毎日通学の行き帰りに携帯していました。モンペの上衣の胸には住所、氏名、血液型などを記した布を縫いつけていました。街のあちこちに「ほしがりません、勝つまでは」とか「八紘一宇」とか「鬼畜米英」などのビラが氾濫していました。

衣料品の購入は切符制になり、食糧事情もひっぱくして来て、夕方までは食堂めぐりの毎日で、姉達と一緒に行列が出来ている所では必ず並び、一杯の雑炊に一喜一憂しました。「ちらし寿司販売」の張り紙をみて、並んでありついたちらし寿司のご飯が、じゃが芋混入で、お寿司とは程遠いものだったということもありました。子供心にもガッカリしたせいか、今でもその時の店の中の様子が目に浮かびます。喫茶店のようなお店でミルクセーキを飲み、サンドイッチは食べずに、家にお土産に持ち帰る時は何となく気持がはずんでいたと記憶しています。

三月十日の空襲の日、夜中に母から起こされ眠い目をこすりながら衣類を重ね着し、ランドセルを背負って家の外に出ました。いつもの「敵機来襲」の時とは様子が違って、夜空が真っ赤な炎でL字型に明るくなっていました。父と兄が防空壕の口を閉め、土をかけて家族皆一緒に家を出て南辻橋の方へ向かいました。

父は「みんな固まっていろ、離れるんじゃないぞ」と家を出

る時からどなっていました。父は、関東大震災の時に、〇歳、三歳、七歳の姉と四歳の兄とを連れて避難する時に、隣家の人が「私が一人連れてってあげましょう」と申し出てくれた親切に甘えて兄を託してしまった経験があります。子煩悩な父には、結果的には離れ離れになった挙句、隣人と一緒に死体となっていた兄のことがずっと心の傷になっていたに違いありません。

南辻橋のたもとにしばらくいましたが、避難して来る人々でふくれ上り、左手の川添いの材木置場にも焼夷弾が落ちました。コの字型の火に囲まれた形になり、持ち出した少量の荷物もそこにやむなく捨て、当時としては近代的な鉄筋の学校目指して逃げました。火に対しては水という考えで川に飛び込む人もいましたが、父の先導で私達家族は固まって学校に避難しました。学校の中も後から後から続々と避難する人々で、立錐の余地もないほどふくれあがりました。入口に一番近い職員室に段々に押し込まれました。校庭の回りのドブ板が燃え上り、職員室の中は電気でもついているように、みんなの顔が赤々と見えました。校庭に面した戸の所で「開けて外へ出よう」「いや今出たら危険だ、第一、火が中へ入って来る」「中で蒸し焼きになるんだったら、校庭の広い場所で死ぬ方がいい」などと、いろいろな声があがりました。父は校庭へ出る方に決断して、「すみません、外に出して下さい」「みんな離れずについて来い」と言うと、まっ先に飛び出し、家族も次々に燃えているドブ板を飛び越えて、校庭に出ました。私も父が差し延べている腕の中へ飛び込むようにドブ板を飛びました。その時には、靴は右足がぬげてなくなっていました。背中のランドセルもいつの間にかなくなっていました。職員室に押し込まれる前に背中に重みを感じましたが、その時、うしろの大人に外されたような気がしました。

最後に母が校庭に出ましたが、母の羽織に火がついて、家族みんなで叩いて消火しました。家族みんなが校庭に出ると、父は「みんな伏せて公園の方へ行け、煙を吸うんじゃないぞ、固まって移動しろ」と言いつづけ、校庭と地続きの菊川公園に行きました。私達の出たあとも続々と校庭に出る人がいました。女の人の髪の毛に火がつき、毛が上へフワーッと燃え上って、悲鳴やまわりの人の怒号などで、地獄絵のようでした。父は「伏せろ、君子いるか、和子いるか、みんないるか」と声をかけ続けました。そのたびに私も一生懸命「君子いるよ」と答えました。

夜が明けてきて、火も段々収まって来ました。校庭には一杯人が倒れていました。あたりは呻き声や、泣き声、身内を呼ぶ声などで満ち満ちていました。放心したようにお釜をかかえてうろうろと歩いているおじいさん、折角、水を持って来たのに息子が息絶えて間に合わず、「死んじゃいやだ、起きてよう」と息子の体をゆさぶっている人、死んだ赤ちゃんを抱いて子守唄

を歌っている若いお母さん、全身にやけどを負って苦しんでいる人、その側で自分もやけどをしているのに介抱している人、それでも重傷の人はほとんどが助からないようでした。

焼け跡に戻るのに、私は恐ろしくて、足が痛いと言って父に背負ってもらい、それでも恐いもの見たさで、父の背に顔を伏せながら周囲に目を走らせました。橋を渡る時に、黒こげの死体や、ピンク色にやけた赤ちゃんの死体に手を伸ばして、黒こげになって橋にはりついたようになっているお母さん、長靴だけは足にしっかりはまっているのに衣類が全部焼けて、サーモンピンクの裸体でうつ伏せになって死んでいる人、脳味噌が飛び出している人、排泄物を出して死んでいる人などで、足の踏み場もないほどでした。

川の中で死んだ人も沢山いたようです。後で川に入って助かった人の話ですが、川から上る時に、瀕死の人に足をつかまれて川の中に引き戻されそうになって、やっと振り払って上ることが出来たそうです。自分の身をかばうのがやっとだったのです。でもその時の感触をその人は一生忘れられないことでしょう。

橋を渡っても、焼け跡は見渡す限りで家の跡形もないため、どこだろうと思いましたが、お風呂屋さんのタイルの一部が焼け残っていたのと、見覚えのある鉄びんがころがっていたので自宅跡はわかりました。家族みんなの顔はススけて真っ黒でした。持って出た荷物で残ったのは、姉が背負って出たリュックを、「荷物を下せ」と引っ張られたのを必死に押さえてずっと守ったお位牌だけでした。でもこのお陰で一家無事だったのかも知れません。

何も食べるものがないので、焼け跡から鮭缶を一個拾って食べましたが、一家は父母、兄一人、姉四人、私と八人家族ですからとても足りません。母が防空壕の中にお釜を入れたのを思い出し、父と兄で掘り出してみました。

高熱で蒸し焼きになったため、お釜の中のお米はごはんに変わっていました。コーリャンの混った、そこらのゴミも一緒に入ったようなご飯でしたが、ともかく飢えはしのげました。はす向かいのおそば屋さんの奥さんと一人息子のアサオちゃんも焼け跡に帰って来ていて、私達が食べているのを見て、「うちのアサオにもやってもらえませんか」と言うので、コーリャン、ゴミまじりを了解してもらって差し上げました。この時のお釜は、ガス釜に代わるまで、戦後もズーッと使い続けました。この時他の荷物も防空壕に埋めて置いたら助かったかも知れません。お風呂屋さんの一家は全滅のようだとその時聞きました。父の関東大震災の時の教訓がなかったら、私達も全員無事ではいられなかったと思います。死体処理に軍隊が来て、トビロでトラックにのせるのを見て、死なないで良かったと思いました。

夜は収容先の江東劇場へ行きました。一家にたった一枚の毛

布と、おにぎりが一人一個で一夜を明かしました。

一家は焼け跡や江東劇場で何日か過ごした後、おそらく肝油ドロップの河合さんの会社に姉が行っていたので、中野へ移り住むことになったのだと思います。集団疎開の話があった時も、両親が手許から離したくないため、東京に残っていた私も、母と一緒に父母の郷里の愛知県へ疎開しました。縁故疎開といっても焼け出されて無一物の者がお世話になるのだから、やせた土地の一部を借りてさつま芋やじゃが芋、かぼちゃなどを自給自足する生活でした。ごはんの中にさつま芋のつるをまぜて、つるの米あえみたいな代物とか、そこらの野草をまぜたような食事をしていました。給食などない田舎の学校で、お弁当箱のふたでごはんを隠しながら食べたり、食べつけない物を食べたためにおなかをこわしたりと、こと食べ物に関しては昭和二四、五年頃まで十分に食べた記憶がありません。今は衣食を無駄に、実に粗末にしていると思います。「もったいない」と言う言葉は死語になってしまったのでしょうか。

父や兄姉たちは、中野で五月の空襲も体験したそうです。私や母は田舎にいたので、それだけは良かったのかも知れません。

戦争を知らない世代の人たちは、軍隊をカッコ良いと思っているかも知れません。でも私は日本人全部が戦争の犠牲になるのはイヤです。まして自衛隊が目的に外れた行動を取るのは、日本人が真剣に考えなければいけないと考えています。命あっての物種です。